在外教育施設における漢字教育

神戸大学附属住吉中学校
山﨑　眞一郎

はじめに

平成二〇年から二年間、サウジアラビアの首都リヤドで、在外教育施設（日本人学校）に勤務した。

リヤド日本人学校では、小・中学校合わせて二〇名ほどの児童・生徒が日本の学習指導要領に基づいた教育を受けていた。（年度途中でも、保護者の異動に伴って多少の出入りがある）中東のサウジアラビア王国は、外国人の観光目的での入国が制限されているが、在外公館や駐在企業では多くの日本人が働いている。当時サウジアラビア全土で一〇〇〇人強、リヤド市内には二〇〇人弱程度の邦人が在留していた。そのうち小・中学校の学齢期にある子どもは三〇人ほどだったろうか。

学齢期にある子どもたちの日本語の学習は、保護者の最も大きな気がかりの一つであった。学習塾もなく、国語教育の専門家は日本人学校の教員だけという状況下では、国語力習得に向け、保護者が焦りを感じることは想像に難くない。インターナショナルスクールに通学する子どもの保護者にも、「事情があって日本人学校に通わせていないが、日本語の教育は何とかしたい」という思いは強かったに違いない。在留邦人教育の使命を得て派遣された教員が、日本人学校に通学するか否かにとらわれず子どもや保護者の思いに応えたいと、休日に漢字検定や漢字学習会を実施したこともあった。（現在も継続されている）

日本の学校の「しつけ教育」やグループ学習等の教育システムが外国の教育関係者の注目を集めているが、海外に住む日本人の保護者の大きな関心は国語教育であろう。日本語のテレビ放送も少なく、日本語で書かれた書籍が貴重品とされている状況下では、格別の努力が必要である。街に日本語があふれ、学習材も豊富で、学校以外にも家庭教師や塾の指導者という教育関係者に恵まれた国内の環境が、正しい日本語や活用できる国語力を身につけたりするためには、とてもすばらしいものだということを、日本の教員は再確認すべきではないか。

漢字学習の可能性

海外での漢字学習については、いくつかの海外日本人学校へ派遣された経験のある先生方に尋ねたところ、「日本と大きな変わりはない」との回答だった。日本人学校には日本から取り寄せた教材も比較的豊富にあるし、日本から派遣された先生がたくさんおられる。

サウジアラビアの東部にダハランという都市がある。そこにサウジアラビア唯一の補習校（休日や放課後に通う学校）が存在する。一五人ほどの児童・生徒が毎週一回木曜に集まって（サウジアラビアは木・金曜が休日）、国語・算数を中心に学習していた。先生は保護者のボランティアであった。三度ほど巡回指導でうかがったが、ボランティアの先生方と「効果的な国語の指導方法」について意見を交換させていただいた。責任感のとても強い方々で、派遣教員が一人もいないにもかかわらず、大変熱心に授業を準備され、すばらしい実践をすすめられていた。国語の教材や

日本語の書籍は、不足気味だと思っていたリヤドよりもさらに乏しい環境であったが、それ故に国語を学びたい、学ばせたいという熱意は強く、派遣教員として少しでも効果的なアドバイスができないか頭を悩ませた。

文部科学省のサイトには、補習授業校教師へのアドバイスとして、新出漢字の示し方、筆順・画数の示し方、筆順指導と部首指導とを並行して行う、終筆の筆づかいを確認させる、筆順テストの簡単な方法、新出漢字の説明を子ども達に分担させる等、漢字指導の工夫が示されている（文部科学省サイト内「補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」）。時間的な制約のある補習校での学習指導を想定した、効率的かつ効果的な指導法は、日本の学校でも参考になるのではないか。

リヤドでの漢字教育

リヤド日本人学校では、各学年五人程度の少人数であるという特長を生かし、毛筆を取り入れた漢字指導を行った。赴任の際に一〇本ほどまとめ買いした物であったが、生徒みんなで共有し大切に使って学習が進められた。

小学校低学年では、払いや、とめ・はね等、筆の穂先が生み出す点画を描くことに興味をもち、すすんで漢字の学習に取り組めた。

高学年・中学生では、単調な練習になることを避けるためにも、隷書や篆書などさまざまな字体を参考にして文字をデザインする授業を実施し、文字の歴史に触れる機会をつくった。伝統的な文化に触れるとともに、漢字の成り立ちや部首についての学習が、意欲を喚起するには大変効果的であった。身の回りの看板や標識もアラビア文字ばかりの環境に住んでいるので、日本の文字をデザインすることは非常に新鮮に感じたようだ。また、漢字をデザインしたTシャツ等に人気があるため、生徒は興味をもって取り組めたようだ。

現地の自然環境や社会習慣が日本とは異なるため、日本の気候や風俗を学ぶ機会をつくろうと、漢字で表される気象や色彩に関することばを取り上げ、意味や読みなどを学習した。五月雨・時雨・驟雨など分野別に類聚し、漢字のことば集めを行ったこともある。

四字熟語や慣用句についても、読み・意味・用法だけでなく、ことばの歴史や成り立ちなどの面からも学習した。中心となる語句（漢字・熟語）を補充するだけでなく、成立の時代や場所などで類別し、掲示物にするなど工夫をした。文字も漢字を大きく書く（書道風に）ことで日本風な作品とすることができたし、挿絵のように添えたイラストも日本情緒を教室に漂わせることとなった。海外の教室では規則や道徳的な文言を掲示することは少ない。日本風な物に児童・生徒は大きな興味をもち、あこがれに似た感情まで抱いているので、日本人学校が子どもたちによる日本の文化センターのようになればよいと、さまざまな掲示物を作って掲示することができた。子どもたちはそれを大切にしている。

漢字学習は家庭でも比較的取り組みやすい。そのため、塾に行かない子どもたちに家庭学習をうながす方法の一つと考えられてきた。しかし、教員の指導できる部分も大きい。そこで、単純な読み・書きの学習だけに終始せず、興味をもたせることを手始めに、漢字の文化全体をとらえ、成立時の中国の様子や文化が継承される形態、日本の漢字文化、平仮名・片仮名との関連、偏や旁の意味やはたらきなど、さまざまな角度からのアプローチを試みた。

いずれも、生徒数も少なく、教員と児童・生徒の距離が非常に近かったからこそできた取り組みであったかもしれない。帰国して、知識を非常に重くとらえる風潮に接しながら、学習者と楽しみながら過ごした時間を懐かしく思いだしている。

やまざき　しんいちろう　神戸大学附属住吉中学校教諭。総合単元学習の指導内容や授業展開等について、現在研究を続けている。